

九月三日、此の演説會開催計畫の爲めに、政友俱樂部瓦解のあられもない噂が傳つて、あの狭い俱樂部の事務所が、新聞記者で一杯になつた日、僕が輕井澤の尾崎先生に報告を齎して歸つて來ると、誰れも彼れも、神経的な顔して、色んなことを僕に話しかけた。唯だ僕と同様に當事者たる猪股君は、常に變らぬ穩な顔して室内を歩いて居た。其の夜二人は晩飯を共にしたが、どんな話をしたか、今記憶して居ない所を見ると、左程込入つた話もせなかつたらしい。

中正會組織前、僕が此の計畫に就いて、倫敦の田川大吉郎氏から受取つた手紙には、花井博士との交渉は、僕其の任に當らず、猪股君に頼めとあつて、花井氏へ猪股君を紹介する書状までも納めてあつた。猪股君は直ぐに花井氏を訪ねた。

其の頃僕は、猪股君を勧めて、秋山定輔氏に紹介した。どうだつたと其の印象

を訊くと、極めて獨創的だと答へた。

『秋山さんは本質的だ。横山君、君には其れが乏しい。それだから秋山さんの遺口は、聯接的で堅實だ。君のは、一石を除けば全體が壊れる虞れがある。』と、こんなことをも附加へた。

猪股君の人物批評眼は、眞に天品である。其の尾崎行雄論、原敬論、田川大吉郎論、植村正久論などは眞に聴き物である。第三十一議會で、尾崎先生の海軍費削減の大演説があつた。演説が濟んだ後、廊下で島田俊雄君に會つたところが、實に傑作だ、僕が聴いた先生の演説中第一等の出来だつたと褒めて居た。僕も同感であつた。此の旨を猪股君に話すと、不愉快な顔をして、『あんなに言葉が過ぎては、後で困ることになる。』と言つた。

『田川さんは頭の人で、又腰の人だ。一旦頭で斯うと極めてしまつたら、永久に腰を揺がさない。あらゆる材料を、悉く自己の判斷に適合するものゝやうに受取

る。但だ腹に乏しい。原敬氏は腕と腹の人だ。腕は冴えて度胸もあるが、腰の人でないから、周囲の状勢を看ては、幾様にも態度や意見を變へて行く。』

何かの機會から、猪股君等三四の人々が謠曲の稽古を初めた。猪股君は勿論初學であつたけれども、其の聲の出具合は、殆んど一年もやつた人のやうであつた。

『静座のお蔭だらう』と、僕が訊くと、

『さうだ、静座もお能も同じ行方だ。』と答へた。

彼れの謠曲的識見に感心した僕は、觀世會に能看物に同行した。觀世元滋君の改名披露の催能で、朝八時から夕方の七時迄、能だけでも七番演せられた。僕ですら多少厭きが來て、切りの嵐山は見残して歸つた。同行の五六人、孰れも初めての連中なので、もう好奇心すら無くしてしまつた。唯だ猪股君だけは終りまで看ると云つて、獨り後に残つた。あの膝一つ崩さぬ端然たる態度が、如何にも能にふさはしきものであつた。

彼れの能に對する熱心と識見とを知つた僕は、著しい催能のある毎に、同行せずには居られなかつた。其の頃九段の能樂堂で見た梅若萬三郎の『景清』は、八島の合戦の物語が非常に型少なであつた。『刃向いたるつはものは、四方へばつとぞ逃げにける』で、左右に面遣ひをし、『冑の鉦を取りはづし』で、扇持つた右手を胸に引著けるのみであつた。

『今日のは特別に型が少い』と、僕が言ふと、

『それが宜い、萬三郎だから殊にそれが宜い』と猪股君は言葉を合せた。彼れが萬三郎を看たのは、是れが初めてであつた。

吾々は宜く芝居をも看に行く。猪股君の觀劇眼は、其の觀能眼にも劣らぬ。或時彼れはこんなことを言つた。

『能は一步步漸進的に高調して、初めの感興が中斷されずに、極度まで昂まつて行く。芝居は折角起きかけた感興が、幾度となく中絶される。一幕全體緊張し

て看ることが出来ない。』

僕が藝術即人生、政治即藝術と言つたところが、猪股君も以前から同じ意見を有つて居ると言つた。

『僕は芝居に於て、縮寫された人生を看得る點に興味を有つ。人生的でない芝居は看るに堪へない』と、僕が言ふと、猪股君は、

『僕は君のやうに、自己を對照として芝居を看ない。全然自己を没却して看るから、劇其の物の有する夫れぐの味を味ふことが出来る。又た看終つた後でも、瞑目すると、現在見て居ると同様な味が滲み出る氣がする。是れは芝居ばかりぢやない、清元や常盤津を聴いても同じだ』と、直ぐ引取つて答へた。

僕の劇に對する趣味は、如何にも偏したものであつた。僕が人生的と言ふのも『自分自身に特有な意味に於いて』であつた。

猪股君の演説は、僕の知つてる中で、一番新味の勝つたものである。尾崎氏よりも、田川氏が新しく、田川氏よりも、猪股君のが更に新しい。政治演説は、固より其の得意とする所であるけれども、精神的な、思想的な方面の演説になると、眞に獨特な味ひがある。

嘗て大隈内閣成立後間もなく開かれた第三會——田川氏の親友後輩の人々が、氏の爲めに作つた會——の席上で、猪股君が述べた開會の辭は、極く簡單ではあつたが、旋風の如き政戦の後を享けて、此の霎時の靜謐を味ひつゝ、ある吾々の胸の底に沁み込むやうな深刻な、滋味饒きものであつた。僕は驚歎の眼を睜つて、彼れの顔を見入つた位であつた。

腹に文章なくんば口に雄辯なしと、僕は常に言ふ。日本人の演説は、修辭の蕪雜、文脈の不整齊が、其の通弊である。衆議院の雄辯家で、演説が其の儘文章として恥かしくないのは、尾崎、竹越、花井、田川の數氏を出でない。猪股君の演

説は、此等數氏の程に文章的で、而かも清新の氣に於いて遙かに優る。彼れは如何なる咄嗟の演説に於いても、必ず整齊たる文章を作る。そしてどうしてあんなに複雑に言へるかと思はれる程、深く巧みに言ひこなす。のみならず彼れの音量と腹とは、其の特有である。彼れが幾分の東北訛を取去ることに努力するならば現に第一流の雄辯家であり、又た將來肩を並べる者なき雄辯家になるであらう。

猪股君の文章は、其の情緒的なのが特色である。冷かな理性の流の中に、燃えたるやうな情熱を迸しらす。彼れは多く書かないが、書けば必ず名篇を成す。辭句の清新なことは、演説に於けると同様である。そしてあの無器用らしい男が、どうしてこんな腕を有つてるかと思はれる位、巧みな筆致を示す。

併し一體に彼れは無性である。世俗的に云へば、怠慢で鈍重である。何も彼も知つて居て、頭では人一倍深く廣く考へて居ながら、體で現すことは人並以上に遅い。今日は非常に忙がしいと云ひながら、二時間でも三時間でも話し込む。直ぐ

是れから行くと云ひながら、一時間も二時間も待たせる。僕等の仲間では、彼れを緩漫堂沈著居士と呼んでゐる。其れを聞き覺えた半玉や待合の女中が、緩漫堂さんと呼ぶと、あは、と笑つてゐる。それだから文章なども、中々急には書かない。書き始めても、筆の運びが甚だ遅い。一吟双涙流の趣がある。併し出來上つたものは、一字一句の動きなき名文である。『世界雜誌』一昨年の五月號に掲げた岡崎邦輔君に與ふる書』の如きが其れである。

猪股君の個人生活には、世間に珍らしい特色が些くない。彼れは三十八の今日まで、未だに獨身である。男子四十未成家と言ふが、彼れは四十になつたらば家を成すであらうか、甚だ覺束ないと僕は思ふ。それ程に彼は出世間的で、且つ品行方正である。彼れが婦人に對して節操の堅固なとは、現代の青年にあるまじく思はれる。それで居て用があれば待合にも行く、藝者も買ふ。併し其れだけである。

『も少し何とかしたらば、いくらか活動的になるだらう。』と僕が言ふと、
 『自分でもさう思ふことがある。僕は生理的に、異性に對して熱し得ない原因を
 有つてゐるのかも知れない。どうもさう云ふ氣になれない。』と、何時も口癖のやう
 に言ふ。

併し猪股君の品行方正なのは、慥に其の道徳的修養に由ること、勿論主な理
 由に數へられる。彼れは十四の時、ステューヴンソンの傳記を讀んで、『人生の目
 的は、國家の利益を計り、最大の名譽を得るに在り』と云ふ句を見出して、非常
 に感奮した。吾が一生は、是れを以て貫ぬかうと決心した。十七の時、韓退之の
 諍臣論の『天の命を懼れ、人の窮を悲しみ、已むことを得ずして起つは聖人也』
 と云ふ意味の句に刺戟されて、最大の名譽を得るを以て人生の目的とするは、功
 利的にして賤しむべき思想なりと斷定した。

其の頃彼れは新聞雜誌の論調を見て、日本は腐敗に沈み、滅亡に瀕しつゝある

やうに慷慨し、國民道徳の基礎を確立する爲めに、哲學研究の志を起した。そし
 て自分を聖賢の徒なりと自信して居た。

同じ十七の時、最も親しい友人で、將來相携へて國家の爲めに奮闘しやうと誓
 つた者が、身を放蕩に持ち崩した。猪股君は自ら聖賢の徒を以つて居たから、自
 分が教化すれば、容易に矯正されると確信して、其の友人と同居した。けれども
 友人の放埒は、遂に直らなかつた。彼れの苦惱懊悶は一通りでなかつた。自ら聖
 賢の徒を以つて居ながら、人一人感化し得ざるとは、何たる淺間しきことであら
 うかと、寂寞痛苦の念に泣いた。

十八歳の夏、暑中休暇で歸郷し、九月上京して見ると、修養の友達は、孰れも
 喫煙を初めて居た。一人は虎列刺病流行の折りであるから、喫煙すると其の傳染
 を免れると云ふ父の勧めに依つて始めたと云ひ、他の一人は、士官學校に入學し
 た所が、馬上豊かにシガーを薫らす威風の、如何にも堂々たるのに打たれて喫煙

を始めたと言つた。

猪股君は驚愕した。吾々が聖賢たらんとして修養しつゝある道德なるものは、果して眞理なりや。自分が道德を修むる必要條件として、彼等と禁煙を誓つたるに、或は傳染病防禦と稱し、或は虚飾の利器と唱へて、之れを棄つること土芥の如し。儻しくば道德なるもの、凡て是れ方便に過ぎざるなきかと、自問自答しては苦悶に苦悶を重ね、遂に全く懷疑者に成つてしまつた。爾來全五箇年、唯だ茫乎として煩悶の裏に過した。時々、深い溜息つき／＼圖書館に通つて、宗教書を耽讀した。先輩は、彼れを狂氣でもしはせないかと危んだ。

二十四歳、初めて基督教に入つて、多年の煩悶一時に救はれたと實感した。同時に、自己の煩悶悉く拂拭されたからは、國家民人の福利を増進すべく一身を抛たんと決心して、初めて政治學に志した。

猪股君が語つて此に至る時、彼れの言は、惻々として人を動かすに十分であつ

た。同時代の青年にして、彼れと僕と、斯くまでも違つた経験のあるものかと、僕は、圓らに輝く彼の瞳と、赤熱に充ちた豊かな頬とを見詰めながら、健氣な彼れの志を、有難く嘆賞せずには居られなかつた。

以上は、二月の下旬に書いたのである。同じ選挙區で、首藤翁と鎬を削つて戦つて居た猪股君は、三月八日、首藤氏の代人と共に上京し、大隈伯の仲裁に依つて妥協退讓した。之れが一つの原因となつて、僕は非常な多忙に陥つた。以下本文は、總選挙終了後の今日——四月七日——やつと筆を執るのである。のみならず、猪股君の此の退讓は、僕の猪股勳論に、新たな材料と、従前になき色彩とを與へることになつた。

二月二十二日、猪股君は愈々抗戦と決して、或程度までの準備をして郷里に歸つた。其の夜十一時の急行列車で上野を立つ豫定であつた。僕の事務所で別れたのは、午後の四時であつた。僕は例に依つて、大にやれ、共倒れで宜しいからやれと氣勢を付けた。僕は猪股君も同意見だと信じて居た。些くとも、別れ際の彼

れの容貌語氣で、さう見て取つた。

ところが一時間と経たぬ中に、猪股君には、僕と全然反對の計畫のあることを田川氏から聞き知つた。僕は激怒せんばかりに驚いた。此の事なきを信ずと急電を發した。数回手紙も出した。後で分つたのであるが、彼れは仙臺に直行して、其處に三四日滞在したから、登米町に出した僕の書信は、數日遅れて入手したわけである。

其の後彼れからの電報は、後援團體の意氣込み凄しく、飛雪を犯して奮闘中と云ふやうな意味のものであつた。彼れの參謀長である大槻縣會議員の手紙も、同様のものであつた。彼等活動の狀況は、略々窺はれぬでもないが、僕の訊かんとする眞意とは、多大の間隔があつた。

越えて三月七日、猪股君は、突然僕の事務所に現れた。首藤軍も、猪股軍も、惡戰苦闘に疲れて休戦した。伊達舊藩主の忠告もあり、一兩日中に兩方の代表者が

大隈邸に集つて、伯爵の仲裁を仰ぐことになつたと報告した。僕との意見の相違に就いても、委しく説明する所があつた。要するに彼れに和戰兩様の底意があり、僕は戦ひ一方で猛進すると云ふ相違である。僕は飽まで自説を固執した。愈々大隈伯の仲裁を仰ぐとしても、何處までも戰意を主張して、一步も譲るまい、僕自身も出席したいと付け加へた。

其の翌々日、僕の知らぬ間に、大隈邸で兩派の妥協が成り、猪股君が退讓したことを、電話で聞いた時、僕は勝つべき戦に負けた遺憾を、露骨に表白した。

其の日の午後、猪股君を始め大槻君や、其他の猪股派の代表者が來訪された時僕は更に自説を主張した。彼等も僕と同様の遺憾を以つて、退讓の始末を回顧した。猪股君は一言も云はなかつた。

翌日彼等は郷里に歸つた。猪股君の此の進退に關する非難は、種々な形式で僕に通せられた。今止める位ならば、初めから思ひ立たぬが宜い、と云ふのが其の

要點である。

今日——四月七日——正午頃猪股君から、昨夜歸京した、直ぐに行くと言ふ電話があつた。僕は出かけるところであつた。一時間ばかりで歸るから、待つて呉れるやうにと云ひ残した。

二時頃歸つて見ると、猪股君は、小使部屋で髪を刈つて居た。顔中毛だらけにして、眼をばちくさせながら笑つて居た。選舉民の氣に投ずるやうにと、幕僚の勸告に従つて延した頭髪は、餘程長くなつて、ハイカラ風に分けるに充分であつた。

理髪が済んで、耳朶のあたりに毛をくつつ著けて、僕の室に這入つて來た。

『大分長かつたね。』と、僕から口を切つた。

『色々跡始末でね。』と、猪股君は、耳の中の毛を、指尖きで掻きく答へた。

『選舉民の意嚮はどうだね。』

『大に宜しい。首藤の應援演説に僕が行くと、熱狂して僕を歓迎したよ。』

『君の退讓を遺憾とする手紙が、僕の處にまで來たが……。』

『初めは誤解もあつたやうだが、僕の説明で、皆納得した。』

『小山君の當選は意外だつたね。』

『得票分けを見れば分るが、僕の退讓の爲めに、首藤も小山も當選したのだ。打撃を受けたのは政友會だよ、澤などがそれさ。』

『あの模様では、君もやつてれば勝てたらう。』

『無論當選してるよ。』

『君は退讓したことを遺憾とは思はないか。』

『僕が退讓した意義は、完全に實を結んでる。敢て遺憾とは思はない。』

——大正四年四月七日夜——

ボナ・ロー

今度の歐洲大戦争に際して、反對黨の首領で、一番男を上げたのが、英國のボナ・ロー、一番男を下けたのが、日本の原敬である。最近の總選舉で、政友會が彼れが如き敗北を致したのは、積年非違の酬ひであること勿論だが、原敬の總裁振り宜しきを得なかつたこと、亦た一原因たるを失はぬ。第卅五議會に於ける無定見、無方針、不徹底、近眼的な見苦しい彼れの戰略、戰術及び解散や總選舉後の女々しい繰言、不道理な怨言などを以つて見るに、彼れの政治的生涯はもう峠を越したかとも思はれる。



十一月、彼れがバルフォアに代つて、今の地位を占めた時、Saturday Review はこんなことを言つた。『彼れの缺點は、彼れが保守主義の傳説に基礎を有たぬことである。Tory imagination に觸れぬことである。彼れは農民に縁故を有たぬ。古き大なる地主派にも關係がない。彼れは Churchman でもない。且つ何人も、彼れと大學制度及び教會制度とを聯結させることは出来ぬ。是れ政府黨が、熱心に彼れを歓迎する所以ではない。』

是れは古き保守黨の非難であつて、又た新しき保守黨の驕ぶ理由である。寔に彼れが統一黨の首領となつたのは、政治的革命である。前任者バルフォアは、有名なる貴族セシル家を代表した。ソールズベリ卿死後、彼れは、此の貴族の最も大且つ有力なる一人である。のみならず彼れは、大地主派の代表者であつて、保守黨の中堅たる地主階級は、彼れに於いて、最も完全なる彼等の權化を見出した。即ち彼れは、指の爪先きまで、貴族的で地主的である。其れに引き變へボナ・ローは、多年グラスゴウで、鐵商に従事した蘇格蘭人である、寧ろアルスター人である。貴族風や地主風、將た教會風の臭ひは、藥にする程もない。彼れの特色を言へば、實業家としての手腕である、中流階級を代表することである。彼れの過去には、何等看るべき官歴がない。若し將來統一黨が天下を取るならば、彼れは未だ一度も平の大臣にならずして一足飛びに總理大臣になる順序である。格式、門閥を尊ぶ英國の政界に於いてのみ、稀有の事ではない、世界に類の無い事である。併し仔細に統一黨の內的改革の趾を訂察すれば、別に不思議でもない。同黨は、故チャムバーレーンが、關稅改革の旗を掲げて以來、革命に等しき變化を遂げた。而して斯の如き變化が黨外には勿論、黨の内に於いてすら、識られずに行はれたことこそ、近代政治の奇蹟とも云ふべきである。ボナ・ローは、此の變化したる新保守主義の代表者として、今の地位に上つた。自由黨にロイド・ジョーヤ在り、統一黨にボナ・ロー在り。英國の政界は、斯の如くデモクラチックになつた。

愛耳蘭自治案に對するボナ・ローの反對演説、今回戦争に際して試みたる舉國一致演説を讀めば、彼れの識見、著眼は直に測られる。彼れは其の出身、經歷と共に、異常なる材幹の新しき政治家である。

ヴァンダーヴェイルド

今回の歐洲大戦争で、白耳義國民の彰した壯絶、凄絶なる勇氣、犠牲的行爲は、永久に、後世人類の精神を昂揚する歴史上の英雄的美譚となるであらう。アルバート王が其の標本である。皇后亦た然り。而かも國民の孰れも、其の人相應の英雄的活動をなしつつある。目下米國に於て、不幸なる同胞の爲め、救済資金の募集に大成功を博しつつあるヴァンダーヴェイルド夫人は、其の雋である。

夫人は、巧妙なる英語と、男も

及ばぬ精力と、其の美貌とを以

つて、約三箇月間各地に奮戦し*



て既に四十萬圓以上の資金を集めた。夫人の米國に於ける評判は非常なものである。白耳義國民の悲惨な境遇と、正義を死守する勇氣とは、夫人を通じて、憾なく米人の同情を喚起した。

夫人の夫は、現内閣の一員で、世界的の名聲ある社會黨の首領である。白耳義は、選舉法改正を、彼れに負ふ所が多い。現行の復選舉法は、彼れ及び彼れの同志の奮闘の産物である。此の選舉法に依れば、一箇年壹弗の家屋税を拂ふ者、或は四百弗の不動産を有する者は、各自二票を有つ。此の制度に依つて如上の資格ある少數の團體は、此等の資格なき多數の團體に打勝つことになる。普通選舉の傾向に反する制度ではあるが、從來政黨の首領共が、無資産の愚民を糺合して、亂民政治運動を敢てした其の弊を杜絶するには充分であつた。

には充分であつた。

ヴァンダーヴェイルドは、幾度も議會に向つて、憲法改正の必要を痛言した。彼れは、議員の多數が自己に反對なるを見るや、『吾々の提案は、今否決されんとして居る。併し吾々は、再び之れを提出せずには已まぬ』と喝破した。果然彼れ及び彼れの同志は、強大なる復讐手段を執つた。即ち社會黨は、總同盟罷工を企てた。其れは十一日間續いた。遂に議會も政府も降参してしまつた。

斯の如く彼れの政治的及び經濟的事業は、白耳義國民と彼れとを、密接に結び付けた。夫人は又た其の夫の主義、事業を宜く理解して、常に白耳義國民大多數の親友を以て、自ら任じてゐる。今回米國に渡つて、彼れが如き大事業を働いて居るのも、所以ある次第である。

戦争の間接的利益として、吾々に著しき印象を與へたものが多々ある。露國の禁酒令が其れである。英國が近く實施せんとしてある禁酒令も其れである。ザヨリヂ・ケナンが言つた如く、露國の禁酒實行は、眞に宗教的信念の最高の發現である。今度の大戦争の如き場合を除いては、到底實現さるべくもあらぬ人類の大事業である。吾輩は、ヴァンダーヴェイルド夫人の事業をも、此の大戦争が齎した間接的利益の最大なるものに數へる。國民を救ふ意思は、心ある人の平時に有する所である。併し問題は、是れが實行に在る、實行力に在る。ヴァンダーヴェイルド夫人は、平時に於いても、勿論偉大なる市民であつた。けれども今回の戦争がなかつたならば、彼女は彼れが如き大事業を執行する機會を見出さなかつたであらう。さるにても其の遺口、働き振りが、歐洲人だけに、世界的で雄々しいではないか。團體の後援を借らず、官憲の庇護に倚らず、唯だ自己の力に依つてのみで。(以上二文大正四年四月)

風間禮助論



風 間 禮 助 氏

風 間 禮 助 論

僕は子供の時、好んで古今の大政治家、大文學者の傳記を讀んでゐるうちに、何時とはなしに、廿一歳で處女作を公にするのが、彼等に共通の特色であると云ふ觀念を得た。そして廿一歳で處女作を出すことが、偉人となる第一の條件でもあるやうに斷定した。自分も何とかして、廿一までに處女作を出したいものと小學時代から考へて居た。

廿歳の頃、力量と境遇に不相應な野心の爲めに、不平で々々々堪らず、遠い外國にでも飛んで行かふかと苦悶して居た時、セシル・ローズが死んだ。僕は其の時まで、セシル・ローズなる者を知らなかつた。死に依つて、初めて彼を知り、彼れの偉大を知つた。そして其の經歷、行徑が、非常に僕の氣に入つた。處女作として、彼れの傳記を公にせねばならぬと決心した程に、彼れの崇拜者となつた。

それからと云ふものは、角力と柔道の外は、萬事を放擲してローヅ傳の材料蒐集に全力を盡した。彼れの傳記は、既に五六種も英國から渡來して居たから、此の方は左程困難でもなかつたが、豫期せなかつた困難は、傳記の體裁及び文體に在つた。マコーレーの此種の著作も大方は讀んだ。史記列傳の叙事に感心して耽讀した。頼山陽、柴野栗山から、徳富蘇峰氏や大町桂月氏を初め、我國古今の史家、傳記作家の代表作は、大抵手の届く限り集めて見た。其の中に、風間禮助著『偉人修養録』と云ふのがあつた。序文で見ると、著者は大學あたりの學生らしかつた。杉浦重剛翁の序文に依つて、翁の門下生と知つた。僕は多年小石川に住んで、杉浦塾に就いて多少見聞する所があつた。天氣の好い日曜の朝など、青葉繁き久堅町の裏通りを散歩していると、杉浦先生が腰に握飯を下げ、門下の書生五六人を連れて、遠足に出られるのに逢ふこともあつた。

『偉人修養録』の著者を、杉浦門下の青年と推定してから、僕は餘り感心もせない其の著作を、比較的注意深く讀んで見た。文章も餘り上手でなく、面白い本ではなかつたが、青年の著者が英雄崇拜心強く、此の方面の修養に心ある人であることは、明かに看取された。それからして風間禮助の名は、深く僕の記憶に留つた。明治四十五年の總選舉の當時、山路愛山氏の獨立評論に、新選代議士の人物評が連載された。其の中で、記者が賞揚措かなかつたのは、長野縣の新代議士風間禮助であつた。風間禮助、聞いたやうな名であると首を傾けつゝ、僕は十年前に讀んだ『偉人修養録』の著者を想ひ出した。併し同一人であるとは斷定し得なかつた。

憲政擁護運動は、僕を代議士風間禮助君に紹介した。初對面の時、僕は直ぐ『偉人修養録』の話を持出した。

『讀んで呉れましたか、あれは僕が高等學校時代に書いたもので、豪傑の研究をやつたり、有志家が癖の爲めに、一度落第までしましたよ。』

と、風間君は、體格不相應に長い髭を捻り、其の捻り詰めた髭の先きに眼を注ぎながら答へた。

風間君等は政友會員の中で明治生れの人々を集めて、正友會なるものを組織した。僕は種々な理由から、此等の少壯代議士に注意を怠らなかつた。そして其の消息を聞くのは、風間君からであつた。風間君の事務所と僕の事務所とが、同じ町内に在る所から、一時は殆んど毎日のやうに顔を合せた。

憲政擁護運動は其の峠を越えて、山本權兵衛伯に内閣組織の大命が下つた。尾崎先生は山本内閣成立阻止運動の旗頭であつた。山本内閣が實現しかけた時、尾崎先生等の脱黨は避け難く見えた。先生は當初から正友會に着目した。僕は風間君を指擧した。

僕は此の問題に關して、幾度か風間君を訪ねた。風間君の態度は煮え切らなかつた。理義に去就する其の性格を以てして、尾崎先生に對する尊敬心を以てして、尙ほ選舉區の事情は、彼れの脱黨を斷行せしめなかつた。

愈々明日は脱黨を發表せなければならぬと云ふ二月廿二日の夜、同志の重立つた人々は交詢社に集つた。僕は最後の一搏として夕方七時頃風間君の事務所に驅着けたが、もう歸宅後であつた。宅に電話をかけると、今歸つたばかりの彼れは電話口に出た。

『要件は分つてる。もうお逢ひするまでもない。尾崎先生の眞意も宜く分つてる。先生の理想的な處は、僕も宜く知つてる。併し脱黨することは、どうも僕の事情が許さないので、……いや、來て貰つて逢つた所が同じ結果になるばかりで……。』
『脱黨問題は次ぎだ、兎に角尾崎さんに逢つてください。それだけで可い。』
『逢つても先生を失望させるばかりだ。』
『それは次の問題だ。逢つてさへ貰へばそれで可い。』

『それぢや事務所まで行くだけにしやう。』

『それで澤山だ。』

『事務所に行くだけだから、着物も著替へないよ。』

『いゝとも、澤山だ。』

僕は事務所に来た風間君を、更に一寸尾崎先生に逢ふだけの條件で、交詢社に案内した。政友會を改悛せしめる目的の爲め、一時黨外に身を置くの必要があると云ふ尾崎先生の説明には、風間君も賛成を餘儀なくされた。芝居好きな人が、用を控へて一幕見て歸る筈なのを、遂に要事を捨て、閉ねるまで見る如く、とうとう風間君は脱黨者の中に入つた。

風間君以外に、長野縣選出の代議士で脱黨した者が五人あつたが、三箇月と経たない中に、先づ岩岡伊代治君去り、小坂順造君去り、次いで笠原忠造君去り、最後に小山完吾君去つて、皆政友會に復歸した。残つたのは、岡部次郎君と風間

君のみであつた。風間君の選舉區の事情は、政友會に還つた四人のに較べると、比較にならぬ程遙かに不利であつた。岡部君は政友俱樂部での、非政友合同運動の急先鋒であつた。彼れは其の頃南清事件を提げて、非政友合同の旗擧げをしやうと日夜懸奔した。其の爲めに一週間に二三度位は、極つて政友會や國民黨系の新聞紙で、同志會の手先きの如く罵られた。此の意味に於いて彼れは堅固な政友俱樂部員であつたけれども、風間君は非政友運動に携はらなかつたから、今にも政友會に復歸するやうに、時とするともう既に復歸したやうに、新聞に書かれた。俱樂部員の中でも、彼れの心意を解しない者は、彼れの脱盟は免れ難いものときへ思つて居た。選舉區の後援者からは、政友會復黨の勸告狀が引續き來た。併し主義に殉して一旦進退した風間君は、よし郷里に於ける政治上の立場を失ふとも、政友會に復歸する心などは毛頭ないと云つて、忙がしい中を、幹事であるが爲めに、毎日午後になると政友俱樂部に來ては、僚友と碁を圍んで居た。脱黨のきつ

かけを作り、又た選挙區の情況を宜く知つて居る僕は、風間君の顔を見る毎に、濟まないやうな、氣の毒なやうな氣がしてならなかつた。

一昨年夏の初め、蒸暑い雨の夜、風間君は十餘人の友達を自宅に招いて、紫朝の新内を饗應した。當時問題の人であつた恒川夫人も、夫君と共に座に在つた。萬龍の面差其の儘で、割に地味な風姿をして、紫朝の爲めに三味線の置場を注意してやつたり、絶えず團扇で風を送つてやつたりする心遣ひが、近い過去の經歷を偲ばせた。僕は、椽端に柱を背にして、浴衣がけで胡座かいてる風間君と、恒川夫妻との顔を見較べて、深い興味に驅られながら、風間君に不似合な此の事件に於いて、却つて著しく彼れの性格が寫し出されたやうに感じた。

一昨年四月の『世界雜誌』に、島田俊雄君の『風間禮助論』が掲げられた。人物品騰の見識に秀でた島田君のことであるから、簡單ではあるが、能く風間君の

特所を言盡してあつた。彼等は大學時代の同級生である。島田君に隨へば、風間君は學生時代から、非常に世話好きな、奔走好きな人であつた。他から色んな相談を持掛けられるやうに出來た人で、頼まれ、ば何事にも眞面目に骨を折る人であつた。代議士になりさうにもない風間君が、突然郷里から選出されたのも、萬龍の落籍に就いて世話したやうな事が新聞に見えたのも、皆此の性格の示現であると思ふことだ。

僕はこんな事を考へながら、不圖楣間にある婦人の油畫に眼を著けた。或夏の夕、河添ひの家で、愉快に騒ぎながら晩飯を食つて居ると、何かの戲談の序でに、風間君はカフスポタンの中に刻み込んだ亡妻の寫眞を見せた。其の時自分の書齋には、彼女の肖像畫を懸けてあることをも話した。僕は是れだと思つた。

風間夫人は恒川家の長女であつた。僕は其の人を知らぬが、父翁は多少知つて居る。日本に於ける建築術の先輩で、古武士風の嚴格な、而かもしとやかな紳士

である。此の父の子たる風間夫人の性格も、推して知るべしと僕は思つた。夫人は明治四十四年の秋、一男一女を遺して逝いた。恒川老夫人は、不幸な娘の遺子を、世界に於ける唯一の所有物である如く熱愛した。『それだから奴等は、恒川に居るものと心得て、滅多に宅には歸つて来ないよ。』と、風間君は例の長い髭を捻り、瘠せた蒼白い顔に微笑を浮べて語つた。

風間君は煙草は喫むが酒は飲まない、僅に麥酒を飲む位である。それでも宴席などでは愉快に遊ぶ。興が乗つて来ると得意の詩吟と追分を謳ひ出す。其の聲の美にして、節の巧みなる、僕は幾度同じ物を聞かされても飽くことがなかつた。

彼れはこう云ふ場處で、至極調和的で快活であるけれども、品行の堅固なことは仲間第一であつた。烏田俊雄君は、風間君は細君を亡くして以來、非常に元氣が衰へたと云つたが、さうかも知れぬ。いたいけな二兒を人手に托して逝いた亡妻の思ひ出は、痛く彼れを刺戟した。夫人逝去後恒川家とあつた關係を續けて

行くのも、亡き人へのせめてもの心盡しであらう。子供が世話になつて居る故もあるが、彼れは恒川家の事と云へば、骨身を損します盡力した。世に珍らしき此の所爲は、僕をして尊敬措かしめなかつた最大の動因であつた。

持前の性格にも依るだらうが、又た家庭や選挙區の事情なども原因をなして、彼れは代議士になつて以來、何等目覺しい働きもせなかつた。『君のやうな學歴、性行、殊に年若のことだから、是非政治を専門にやらねば。』と、僕が勧めると、何時も風間君は、『僕も政治を専門にやりたいとは思つて居るがね。』と答へるけれども、一向専門に熱心する風も見えなかつた。併し今になつて醜つて考へると、是れが彼れの尊敬すべき資質である。風間君等の新代議士が出て間もなく、例の憲政擁護運動を手始めに、政變は政變に續いた。新しき政治運動者が、風間君の友人の中から澤山出た。政治運動には必ず演説を必要とするが故に、演説會に出

席する辯士の名は、宛かも寄席に出る落語家や浪花節語りと同様に、新聞に掲載されるのが常である。風間君の名は、決して彼等の中に見出されなかつた。賣名を熱求する現代人の中に、彼れは珍らしく此の欲念の乏しい人である。

併し風間君は演説家としても、一とかど成功すべき要素を有つて居る。僕は今年春、彼れと共に、長島隆二君の應援に行つて、初めて彼れの演説を聞いた。第一彼れは、擾々たる今の政黨者流の中では學識が勝れて居る。其の性格が溫容、中和の氣に饒んで居るから、政黨者流に通有の誇張、極論の風がない。事實を列舉し、冷靜に之れを批評し、演繹する學究の態がある。彼れは文章家で、且つ作詩の趣味と素養とを有して居るから、演説の修辭は宜く整つて、乾燥でない。但だ一體に熱を缺き、音量乏しきを恨みとする。彼れは芝居氣のない人で、隨て躍起になれない人である。

今度の總選舉の失敗は、風間君に新たなる教訓と意義とを與へたやうだ。前回には政友系に屬する郷里の有力な銀行の重役や株主を後援者とした。今度は其れ等の人々を敵に廻した。其の不利は云ふまでもないが、彼れが代議士となつて以來の堅固な操持と、今端なく政府黨であること、は、此の不利を償つて餘りあつた。要するに大勢の上に於いて、何等悲觀すべき所はなかつた。現に投票前日迄の當局者の調査では、彼れは第三位を下らなかつた。然るに形勢は一夜のうちに激變した。例の有力な銀行が、彼れに代へて推し立てた候補者は、政府反對黨員でありながら無事當選し、却つて彼れは次點に落ちた。要するに彼れは他の全ての條件に於いて、縣下全候補者の何人にも劣らなかつたけれども、唯だ一つ金力に缺くる所があつた爲めに落選した。

併し是れは珍らしい事柄ではない。政府當局者は選舉取締法を勵行したと揚言するけれども、金力の跋扈のみは、如何ともすることが出来なかつた。否政府自

身が、富豪候補者の出馬勸説に熱中したぢやない歟。其の證據は新代議士の顔振れを見れば分る。而して其の結果の如何なりしかは、今回の臨時議會に於て發言した富豪候補者の頭腦の程度を看れば分る。僕は忌憚なく明言する、新議會は富豪代議士の増加したるが故に、前議會に比して一段低級となれりと。今の選舉界で、最も恐るべく忌むべきは金權の壓迫である。

風間君は此の金權の壓迫に依つて敗れた。三月廿七日午後五時、僕は彼れから、『捲土重來を期し、御好意を感謝す』と云ふ電報を受取つた時、是れを床に投げ付けて熱涙を吞んだ。日本全國七百人の候補者中、僕に取つて、彼れは必ず當選せしめねばならぬ第一人であつたのに。

併し此の失敗の經驗は、決して徒事ではなかつた。彼れは選舉區から歸京するや、其の得た經驗を詳に僕に語つた。僕は此の高價なる經驗の自覺を喜ぶと同時に、一層深く其の捲土重來の意氣旺んなのを悦ばずに居られなかつた。

『是れから行き直した。本當に行るのは是れからだ。』と言つて、赤き血汐を顔に漲らせて振ひ立つた。そして北信の青年が、彼れを迎ふるの切であつたことを、特に力を籠めて悦んだ。

四月十六日の夜、紅葉館で總選舉後第一回の中正會の會合があつた時、彼れも出席して、慷慨淋漓たる選舉談を試みた。銘々隠し藝が始まると、彼れは得意の詩吟をやつた。詩の内容が、今度の政戰の述懐であつたのは、一層滿座の注意を牽いた。

回頭四十二春秋 半屬書卷半牙籌

自擬經國濟世才 深愧雄心猶未酬

半生連遭憐數奇 獨守迂拙草廬中

英雄未願美人末 青山白雲空悠悠

人間逢遭朝又夕 糟糠婦遺二兒逝

家無儋石身無累 初知三十天下繫
爭鹿中原誇逸足 高材私任好選良
如今政界風濤惡 獨掉孤舟歌滄浪
誰臨大節全進止 高天厚地任鴻翔
重從政戰君休嗤 國家安危在斯行

思ひ做しの故か、吟聲も常に勝つて出來が宜かつた。あの徹る美しい聲で、高低抑揚を極めた謳ひ振りは、詩吟の有する最高度の感じを與へた。人間逢遭朝夕、糟糠婦遺二兒逝のあたり、一座黯然となつた。之れが終ると、彼れは今夜九時東京驛發で臺灣に行くと言つて暇を告げた。

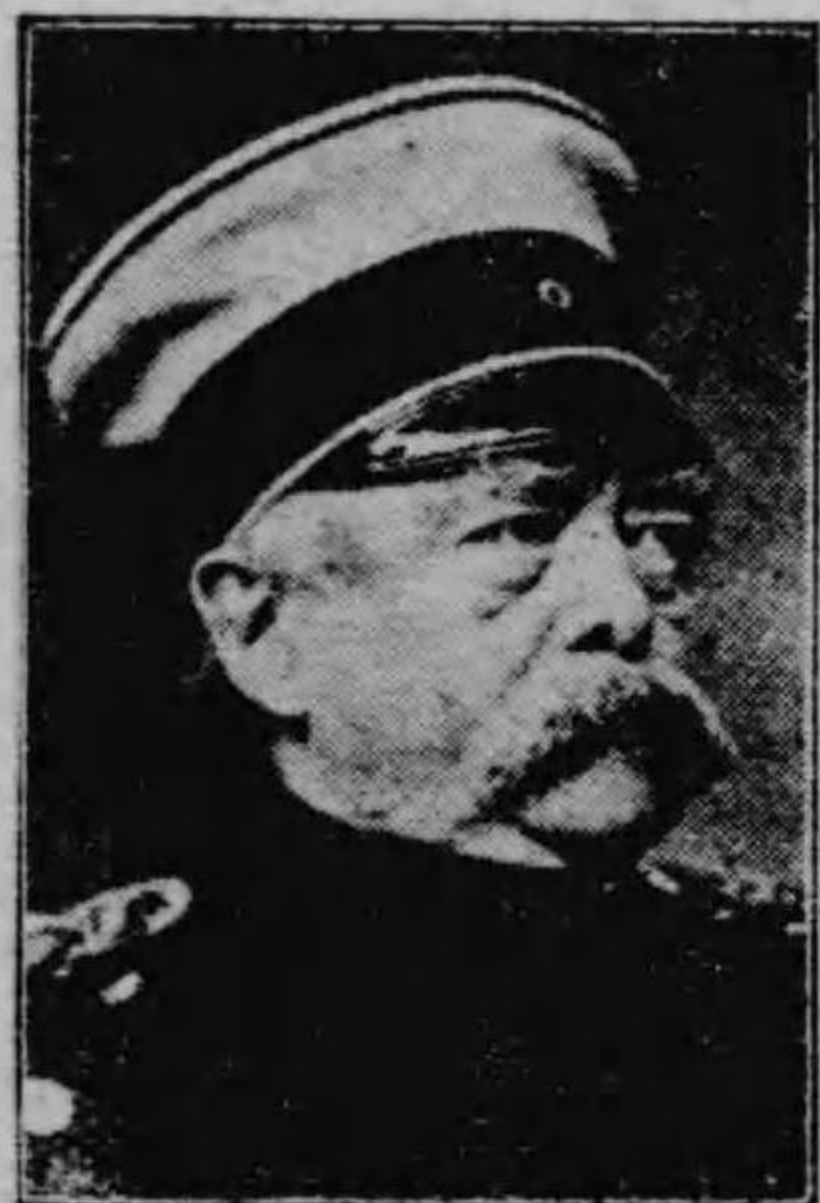
あはたゞしき別れであつた。僕は停車場に見送つたけれども、風間君が發車間際に駆け著けて、最後の客車に飛び乗つた爲めに、とう／＼顔を合せる間もなかつた。

ビスマルク

二二六

獨逸が學國の精力を盡して、生死の戦を戦ひつゝある時(四月一日)、其建國の第一人者ビスマルクの生誕百年祭は、世界の隨處に於いて、獨逸人に依つて示威的に盛大に執行された。併し世界の感情は、地下のビスマルクは今度の開戦を不本意とし、獨逸の外交宜しきを得ずして、今の苦境に陥つたことを遺憾として居るだらうと云ふ風に見えた。

ビスマルクの下に於いて普魯西亞は、丁抹、壤地利、佛蘭西の三國を相手に、交る々々三度戦つて三度とも勝つた。そして何等外國の干渉も、反*



* 感も招かなかつた。然るに今將た何の状ぞ。天地間にたつた壤洪國一箇國の同盟あるのみで、四面咸獨逸の敵ならざるはない。ビスマルクの生誕百年祭に當つて、思はるゝは此の對照である。

獨逸はビスマルク時代と今日とに於いて、何故に斯く變じたる歟。問題は簡單である。取りも直さず、獨逸が文官の支配者を、軍人に取換えたからである。ビスマルクに代ふるに、カイセルを以つてしたからである。ビスマルクの時に於いて、軍人は國家の奴僕であつた。然るに今日に在つては、軍人は國家の主人である。昔に軍事に於けるのみならず、内治外交亦た其の支配のまゝである。而かも其の結果を看ぶ、文官たるビスマルクは、國家を三度戦争に引入れたが、三度とも大勝利を占めた。軍國主義の權化たるウ

イリアム二世は、却つて多年戦争を避け得たのであるが、今初めて戦争をすればあの態だ。不思議な現象である。

理由は明瞭である。軍人は國勢を判するに、唯だ戰略にのみ立脚する。是れに反して政治家、外交家は、精神的、道德的勢力を打算の中に入れることを怠らぬ。例へば彼等は、開戦の危機逼るや、我同盟國は、果して同盟條約を確守する歟、中立國は中立狀態を繼續する歟、敵國に同盟し加擔するの國はなき歟、此等の機微なる狀況を偵察して、最善の努力を盡す。此の目的の爲めには、普く列國の上に廣がれる道德的信念の存在を認識せなければならぬ。そこで第一に避くべきは、挑戦者の惡名である。あらゆる手段を盡して挑戦の責任を避け、自國の態度、行動を正常ならしめ、或は正當に看えるやうにせねばならぬ。之れに反して、軍人は戰場に於ける勝利を念とする餘りに、列國の心理狀態を吟味することを怠る。彼等は戰場に於いて勝つ爲めには、國家をして挑戦者の惡名を負はしめることをだに厭はぬ。

是れビスマルクが三度び戦つて三度び勝ち、カイセルが目下獨逸をして孤立の苦境に陥らしめた主一の原因である。他の語を以つて言ふならば、文治主義の、軍國主義に對する勝利である。ビスマルクはカイセルよりも偉人であつた。彼れはカイセルのやうに、三箇國も四箇國も一度に相手とするが如き拙劣な政略は取らなかつた。壤地利を征した後で佛蘭西と戦つたなど、利いた風な觀察をするのは皮相の見である。根本の道理は、ビスマルクが常に文治主義を把持して、カイセルのやうな軍國主義者とならなかつたことに在る。以上コロンビア大學教授、モンロー・スミス氏の所説に負ふ所多し。(大年四年六月)

二二七

エフ・イー・スミス

エフ・イー・スミスの統一黨に於けるは、猶ほロイド・ギョーシの自由黨に於けるが如き乎。彼れは人氣者たる點に於いて、統一黨第一である。統一黨の味方は、ロイド・ギョーシに對抗する必要がある場合は、屹度彼を引張り出す。

彼れの人物は、故ランドルフ・チャーチル卿に酷似してゐると評される。寔に其の突撃的なるに於いて、何物をも怖れざる勇氣に於いて、其の雄辯の辛辣なるに於いて、彼



*此共通の點が多い。ランドルフ卿の神速なる成功は、ナポレオンの所謂『午前二時の勇氣』に負ふと云はれる。卿は嘗てデウオンシヤ一卿と激論の末、決闘を申込んだことがあつた。スミス亦た此種のこと

勇氣に饒んで居る。其の長き斧形の顔面、炯々たる黒色の眼瞳、薄く、皮肉な、侮蔑的な、そして無限の辛辣と流暢とを示して居る其の上唇、輕快活潑にして強味ある面貌、印象深き表情、此等は全く彼れの有つて生れた剛情我慢の性格を表して居る。

千九百十一年、統一黨内に新舊兩派の抗争が起つて其の極首領の更迭とまでなつたが、當時新派の中堅となつて、所謂 Confederates として知られてある少壯有爲無名の闘士より成る團體の牛耳を執つたのは、

久松 久松 久松

外ならぬスミスであつた。或日バルフォアは、例の調子で傍人に問ふた。『エフ・イーは幾歳なんだれ。』

此の年若き勁敵が四十歳であるとの答へを聞いて、バルフォアは言葉を繼いだ。

『私は六十四だ。彼れも首領となるにや、少し待たなきやなるまいぢやないか。』

スミスは議院第一流の闘士である。彼れの性格と雄辯とは、天成の闘士たるを證して居る。其の雄辯は火の如く、攻撃力亦た餘りに猛烈なる爲めに、或は彼れの政治的將來に疑を挟む者もないではないが、議院政治家が在朝、在野の相違に依つて、其態度に變化あるは當然の事である。殊に千九百六年の總選挙に於いて、見る影もなく打負かされた統一黨に在つては、只管に銷沈せる志氣を鼓舞し、元氣の恢復に努力するが、領袖の任務である。此の點に於いてスミスは、絶好の働き振りを示し來つた。併し是れを以つて、彼れが政權を執つた時も亦た同一なるべしと思ふは、餘りに考へが單純過ぎる。

如何なる事業でもさうであるが、就中政黨は取分け人物主義を旨とする。一人在つて起り、一人を缺くが故に衰ふるは政黨の常態である。だから英國の政黨は、人物養成を主一の事業として居る。大敗後の統一黨員は、『我黨にはスミスが居るから、今に見ろ。』と口癖のやうに言ふ。以つて英國の政黨の今日ある所以を知るべく、又スミスの人と爲りをも知るべきである。彼れは今年四十四の少壯政治家である。

五月廿五日聯立内閣成立するや、彼れは檢事總長に任ぜられて、内閣不参列の大臣となつた。彼れは親譲りの法律家で、牛津大學時代から、拔群の法律家的能力を發揮した人であるから、檢事總長は寔に適任である。但だ實力、聲望に比して地位の低きは、ボナ・ロー、バルフォア、ロンダ、チャムバーレーン等の先輩があつて、頭がつかへて居るのだから致方がなからう。(大正四年六月)

オルガ・ノヴィコフ

各種各様の新しき婦人の出る世の中であるが、露國のオルガ・ノヴィコフ夫人のやうな人格、識見及び政治的事功の婦人は、先づ世界を通じて現代に類例なしと云はねばならぬ。恰かも歐洲大戦争開かれ、英露同盟して共同の敵に當りつゝあることは、約半世紀に亘つて、兩國の同盟を卒先稱道し來つた夫人の効績を知れる者に取つては、此の偉大なる女性に對して一層の敬意を深くする次第である。

夫人は初めから政治家、政論家たらんと志した者でない。彼女が世間の認識を得た



*のは巧妙なるピアニストとしてであつた。然るに政治上大なる抱負を有つて居た兄の死は、端なくも彼女をして、政治に志し、亡兄の遺圖を成さんとの決心を固めしめた。兄は千八百七十八年の土耳其

戦争に於けるスラヴ主義を辯護しつゝ死んだのであるが、彼女は亡兄の志を推擡げて、更に英露の親交、同盟を提唱するに至つたのである。爾來四十年間、英國に於ける彼女の地位は、顯赫を極めたものであつた。其のクラリツサのホテルに於ける夫人の室は、英國の有力な政治家、記者、藝術家の集會所となつた。デイズレリーは、夫人を呼んで「The M.P. for Russia」と云つた。ノヴィコフ夫人とグラッドストーンとの、個人として或は公人としての交際の如何に親密であつたかは、ジョン・モーリーの虞翁傳及び夫人自身

の著書を見れば分る。

夫人は倫敦タイムスを初め、英國の有力な新聞雑誌に政論を投書して、其の目的の實現に努めたのであるが、夫人の英國に於ける社會的勢力は大したもので、彼女の家は、英國に於ける露西亞勢力及び露西亞思想の中心と云つても差支へない程である。夫人は毎年約六箇月、倫敦に滞在することにして居る。

どちらかと云へば、夫人の思想は、概れ現状維持に傾いて居るが、それでも其の同情心の博大にして、同情發現の爲めに大膽の行爲に出ることは珍しくない。現に今回の戦争始まるや、露國皇帝に上奏して、政治犯罪者の大赦を請ふた。其の上奏文は、倫敦タイムスに掲載された。夫人は、政府の形體を變更せんと企てた此等の犯罪者は、其の故國を愛するに於いて、他の人後に落ちる者でないといふ力説して居る。

今度の戦争開始は、多年刻苦稱道し來つた夫人の素志が成就したものであるけれども、彼女は此の程度を以つて足れりとするものでない。英露間に完全な同盟を成立せしむべく、今日尙ほ最善を盡しつゝある。夫人は開戦以來ベトログラードに在つて、其の高齡にも拘はらず、昔のまゝ活動を續けて居るが、開戦の當初は莫斯科に居た。そして聖莫斯科に在つて、開戦の光景を目撃した其の印象は、夫人の長き變化に富める生涯に於いても、眞に忘るべからざるものであると、自身物語つた。

宗教運動に於いて、藝術に於いて、婦人參政權運動に於いて、或は家庭に於いて、世界的名聲を博した婦人は尠くないが、ノヴィコフ夫人の如く、國際政局の上に一大事業を成した婦人は稀れである。況んや其の手段の、一に公開的の言論に依れるをや。(大正四年六月)

尾崎行雄論



尾崎行雄氏

藝術上より見たる尾崎行雄氏の雄辯

尾崎行雄氏と共に、現内閣の有力なる閣員たる加藤高明男は、尾崎氏の雄辯を畏敬せる人だと聞いて居る。尾崎氏の雄辯に敬服する者は、常に加藤男一人のみではないが、加藤男の敬服の理由は、他の仲間のよりも、一段洗練した味がある。男爵は、英國の立憲政治に精通した人だけに、辯説の價值を重んずることが多い。立憲政治は、言論政治である、かるが故に雄辯は、立憲政治の必須條件である。雄辯家は、最も偉大なる立憲政治家であると云ふコンヴェクションを有つて居ると聞いて居る。

寔に是れは、正當な意見である。併しながら、是れは未だ效果論たるを免れない。辯説の價值を、其の效果より見たる意見に過ぎない。即ち辯説の價值の批評

としては、第二義に墮して居る。吾輩は、日本人にして、辯説を藝術的に批評する者の絶無であることを、嘆はしく思ふ。

是れは一方に於いて、藝術的に批評す可き程の雄辯のないことも、大なる原因であらう。義太夫、長唄、常盤津、清元、さては浪花節なども、藝術的に玩味し、批評する長い間の習慣を有しながら、演説のみを除外することは、演説を尊重する意味からして、前の數種の音曲と同一に視ない爲めでもあらう。さりながら是れは、演説の進歩して居ないこと、同時に、國民に批評眼なきことを表明するものである。あらゆる人事の極致は藝術的であると云ふ、徹底せる批評眼なきの結果である。

宗教の本質は、實際生活を離れて、其の意義を成すべきものでない。併しながら現世利益を目的にして信仰に入らんとするは不可能事である。信仰を獲得した

る後、豫期せざるも、必然に、現世利益は獲られる。演説の目的が、藝術的なるに在るや否やは問題でない。但だ藝術的であればある程、演説の効果の増して來ることは、疑を容れない所である。尾崎氏の雄辯が、近年の政變に於いて、幾何の効果を生み出したかを知りながら、其の藝術的價值を閑却するは、不徹底極る觀察と云はねばならぬ。

吾輩が、尾崎氏の演説を聴く度に、遺憾に堪えないのは、其の音量に乏しいことである。今日の政治家で、雄辯家の名を馳せた人々の中に、——大隈伯がある、犬養氏がある、大石氏がある、島田氏がある、花井氏がある、——尾崎氏は一番音量に乏しい。是れは、氏の雄辯家としての第一の缺點である。

一體日本人は、世界に於いて、最も音量に乏しい人種である。聲音樂を職業にして居る人々の中で、是れぞと云ふ程の音量を有つて居る者は、幾んど擧げるに

足りない。梅若萬三郎、越路太夫、雲右衛門、松本幸四郎位なものである。大抵の者は、其の演ずる役に相應しい音量を有しないが爲めに、常に甚しき不便と苦痛を感じつゝある。

此等の人々は、孰れも専門家である。専門家既に然り、日課として音聲を使はぬ演説家の音量に乏しいのは、當り前かも知れぬ。が、併し尾崎氏の音量に乏しいのが、甚しく氏の雄辯の價値を小ならしめて居ることは否定されぬ。あの狭小な帝國議會の議場では、左程でもないが、歌舞伎座あたりの劇場となると、其の不足が著しく耳立つ。例の國技館となると、非常に苦しうな節々が表はれる。(是れは常に尾崎氏ばかりではないが。)尾崎氏の雄辯は、莊重を以つて優つて居るにも拘はらず、一點強味を缺くは此の音量不足の爲めである。

尾崎氏は音量に乏しいけれども、其の聲の質は音量に乏しい人に有勝ちな女性

的なものではない。人、或は、氏の音が、も少し甲高であつたならば、宜く徹つて一層便利であらうと云ふかも知れぬ。併し吾輩は反對意見を主張する。聲音樂の知識に乏しい一般の人々は、比較的甲高な調子を賞美する癖がある。中村吉右衛門は、久しく名優と稱せられ來つた青年である。あの腹、あの調子、あの白廻は、團州以後唯だ一人であるかの如く、褒めそやす者が多い。併しながら吾輩は、吉右衛門の常に音量に乏しいのみならず、比較的甲高な調子を忌む。吉右衛門はもう三十歳である。あれでは仕方がないと、何時も吾輩は、思ふことである。帝劇の四月狂言に、澤村宗之助がお初を演じた時、あの思入れ澤山な科に伴ふ白が、如何にも徹底的で善いと褒めたものが多かつた。併し吾輩は、あの甲高なだけ含蓄に乏しい調子を、常に嫌はず思つて居る。どうしても、今の俳優で音調の取るべきは市川八百藏だ。世間で從來彼れは一本調子だと稱へ來つたのは、所謂甲高派の僻見である。

調子の高い點に於いて、婦人は遙に男子に優つて居る。併し音樂的に、婦人の聲は必ずしも常に男子のより勝れては居ない。低い調子で、最も能く透徹とほる聲は、最も多く鍛練された聲である。

尾崎氏の音は、量に於いて、幅に於いて、甚だ不足であるけれども、割合に能く透徹する。是れは、多年の經驗に依つて、其の聲が、所謂板に着いて居るからである。のみならず、尾崎氏は、聲の使ひ方に於いては、現代の演説家中第一人と云ふべきである。

有り餘る聲を加減して適度に使用すること、不足な聲を有る様に聞かせることとは、藝術的に云つて、其の困難に多くの相違はない。聲を八分に使つて、十二分に聞かせるのが、其の人の力量である。尾崎氏は、如何なる場合の演説に於いても、聲を無理に使用はない。比較的不足なる音量を以つてして、比較的

多量の聲音を有する人々以上に、力と強味とを示す。

極めて長い演説の困難なる如く、極めて短い演説も、亦た同様に困難である。

其れは如何なる名人でも、或る程度に至らなければ、高調に達することが出来なからである。五幕續きの劇の中には、或る一幕の要所やまがある。一幕物の中には、或る箇所に要所やまがある。一段の義太夫の中には、一番の謠曲の中には、必ず或る箇所に要所がある。是れは、其の作の生命の高調せる頂點なのだ。即ち此の高調の頂點は、如何なる傑作にも必ずあることはあるが、其の在る場所が、屹度其の作物の中程か、然らずんば結末かに在つて、決して劈頭には無い。是れ理、當に然る可き事柄である。

雁次郎の梅忠は、現代が有する最も大なる藝術品であるが、忠兵衛の要所は、其の出の、『梶原源太は己れかいな』の科白ではなくして、封印を切つて、愈々梅

川の手を曳きながら、そこくくに暇乞ひして逃げ出す所に在る。原作を読んで見れば、作者の精神が、此の箇所について、高調せることは明瞭である。

吾輩は、先頃梅若萬三郎の『隅田川』を見て、あの溢れる力を、内に々と藏しながら、外に平淡を表せる、圓熟した藝に驚嘆したことがあるが、此の長い々々緊張し切つた一番の中で、結末の『見えつ隠れつする程に』が、作全體を通じての唯一の要所であることを覺知した。

支那の文章家は、文章の冒頭に、美辭麗句を飾る傳説的の習癖を有して居る。さりながら餘程の幼稚なる讀者に非ざる限り、『六王畢四海一、蜀山兀阿房出』の句を以つて、『阿房宮賦』の生命なりと傲す者はあるまい。作者の杜牧之は、支那的文章家流に、冒頭の此の句に、全精力を傾注したかも知れないが、人性欺く可からず、此の文章の要所は、實に結末の『嗚呼滅六國者六國也、非秦也、族秦者秦也、非天下也』の句に在るのである。

吾輩は、能樂に於いて、多くの場合、一の松で發聲し、歌舞伎に於いて、大抵



花道の七三で
口を切ることを、極めて意味ある事と思つて居る。
一人の俳優でも、揚幕の蔭に居る時と、舞臺に出た時

とは、其の心持に大なる相違がある。揚幕を出て、一步步々本舞臺に近づいて来て、役の性情は高調して來るのである。

如何なる雄辯家の演説と雖も、初めには、多少の落著かざる所、澁滞する所がある。若し其の演説が、極めて短いものであつたらば、遂に一箇所の高調もなくして終るのである。餘りに長ければだれる恐れはあるが、餘り短くても、技倆を用ゐるに餘地がない。是れは動かすべからざる通論である。但だ尾崎氏は、長演説に於いても現代無比の名人である如く、短い演説に於いても、必ず一箇所の高調を造り得る、殆んど唯だ一人である。近い例では、本年三月十四日、貴族院廻付の豫算案再議の時試みた院議尊重論がある。當日の代表的演説者としては、他に武富氏、犬養氏、花井氏があつた。孰れも長さに於いては、同じ位の短い演説であつた。併し尾崎氏のは、群を抜いた出来榮であつた。藝術的に批評すれば、高調の度が、他の辯士のより遙に高かつた。

尾崎氏が、短い演説に於いて、他人の企て得ざる高調に達することの出来る伎倆は、頗る研究に値する。氏の天分に由ること勿論である。併しながら吾輩は、

其れ以上、経験の効果なりと断定したい。熟練せる俳優や音楽家は、練習を積まざる新物でも、何とかして演り畢せる。是れ経験の賜である。演説家としての尾崎氏の伎倆は、如何なる簡単な演説、如何なる瑣末な演説に於いても、必ず一箇所の高調を造り得るだけの奥堂に達して居る。

尾崎氏は、演説の済んだ後、(勿論力の入つた大演説) 必ず極つて、腹案とは違つたものが出来たと云はれる。世間の輕卒にして頭腦の不透明な連中は、直ぐ脱線だなど、速断するだらう。此の事、即ち尾崎氏の雄辯家たる資格の證明たることを知らない過ちだ。

名優團十郎は、忠臣藏の大星由良之助を幾十回となく演じたが、一度たりとも腹案通りに行つたことはないと云つてたさうだ。さもありさうなことである。筋書通り無事に演じ終るやうでは、傑作の出来る筈がない。藝術は、人の力の緊張

し得る極致である、精神の微妙なる發現の頂上である。豫定通りの繼ぎ接ぎで出来得べきものでない。原作の意味を履き違へては、勿論沙汰の限りだが、書いたものを讀むやうに、豫定通りきちんと行くやうでは、それだけ舞臺效果の減する譯である。尾崎氏の演説に、生命の活躍があり、神彩奕々たるものがあるのは、惟ふに此の故であらう。

大隈伯の演説を聞く者は、必ず先づあの一種の節廻しとでも云ふべき音の使ひ方に氣が付くであらう。日本の演説家の中で、大隈伯程言廻しに苦心して居る人は少いやうだ。雄辯法を一個獨立の學問として居る歐米人に取つては、別に珍らしい事でもない。彼等は、俳優が白廻しに苦心する如く、演説の言葉遣に苦心して居る。大隈伯の此長所は、近來稍弊に墮したるの嫌ひがないでもないけれども、七十七の老翁の演説としては、實に新しい遣口で、驚き入つた次第である。

日本人の演説では、修辭の拙劣、寧ろ用語の支離滅裂と共に、此の言廻しに何等の工夫も無いことが、大なる缺點である。座談も下手だが、演説となると一層拙くなるのは、此の言廻しに注意をしないからだ。大隈伯は、此の言廻しに苦心をした雄辯家である。其の語と語との間に距離を設けて、一種の調子を現はして居られるのは、苦心の結果である。聲音樂の知識なき者は、伯の演説に、何が故に、彼れが如く言葉と言葉との間に音を長く引くのであるかと怪しむだらうが、あれが調子を出すには已むを得ぬ行方である。低い聲の座談ならば兎も角、高調子で腹から聲を出す場合に、早口に語と語との間を繋接せしめては、音樂的な調子が出ないばかりでなく、言葉其れ自身が不透明になる。

尾崎氏が、一種の調子、氏特有の抑揚を以つて語をやられるのも、同じ苦心と經驗の結果であらう。演説が益々佳境に入つて來ると、蒼白な顔色は、稍赤味を帯びて來る。分量の乏しい聲は、意外と思はれる程幅廣く、且調子高になる。句

と句との間に、調子の變化があるのみならず、語と語との間にも、強い沈痛な抑揚が、巧みに試みられる。此の時に於いて、氏は最も偉大なる藝術家である。萬人の精神を堅く把握して、絲毫の搖ぎだに許さない技倆に至つては、現存せる他の如何なる種類の藝術家も、企て及ぶ所でない。



* 尾崎氏が何かの機會で、歌舞伎座に雲右衛門を聴かれたことがある。後で吾輩が、其の感想を訊いた所が、

昨年の二月頃であつたと記憶す*
中々旨いものだが、體に隙があると云はれた。全く同感だ。雲右衛門は、身振りに於いては、全然無技巧だ。厭味のないのは善いとしても、甚しく間が抜けてる所がある。其後、同じ歳の夏の初め、大阪の帝國座で、尾崎氏の演説があつた時、

雲右衛門は、九州行を一日延して傍聴に行つたと、人傳てに聞いた。併し雲右衛門自身の感想は聞かなかつた。尾崎氏は雲右衛門の身體の構へに隙があると評されただけ、自身演壇に立つに當つては、最も深く、身體の構へに注意する人である。十中九人までの辯士は、登壇すると直ぐコップに水を注いだり、水を飲んだりして、間を造つて行かうとする。尾崎氏は、徹頭徹尾水を口にしない人である。登壇すると、左手を背後に廻し、右手の拇指で、卓子の端を押へてぐつと腹を極める。昂奮しかけた精神は、活動を初めるべく程好き程度に落著くのである。氏のゼスチユア身振の技巧は、極めて單純で、手が少い。殆んど四五種に過ぎないと思ふ。(寫眞参照)嚴肅な落著いた態度以外、是れぞと云ふゼスチユア身振はないと云つても善い位であるが、要するに其の整つた、隙の無い姿勢は理想的のものである。

尾崎氏は、英語に堪能な人であるけれども、其の手に成つた文章は、純粹の漢文體である。同様に、氏の演説の用語、文脈は、非常に漢文素が勝つて居る。隨

つて莊重はある、強味はある。併し稍單調に流れる嫌ひがある、窮屈に失する恐れがある。要するに吾等の理想する新派の體裁では無い。(此の點に於いて、田川大吉郎氏の演説には、何とも云へない新し味がある。猪股勳氏には、更に新し味が多い。附言して置くが、尾崎氏は五十六、田川氏は四十六、猪股氏は三十七である)尾崎氏は、現代第一の雄辯家であるが、今後若し氏に匹敵する雄辯家が出る時には、必ずや其の用語、文脈に於いて、氏の演説とは、相異つたものであるに相違ない。さりながら尾崎氏が、雄辯家として、特絶の地位を擅にせるも久しいものだ。議會初つて以來、もう二十五年である。其の頃生れた人でも、今は一と角の雄辯家になつて居る歳である。併し吾輩の知れる限りでは、今日の議會で、尾崎氏に亞ぐべき雄辯家の素質ある者を見受けない。國民が、倍々デモクラシーに覺醒して來たに連れて、近年倍々尾崎氏の雄辯の効果が増加して來たことは、何人の眼にも著しき事實である。政界に或る重要な問題が起つた時、青年會館か

ら初まつて、明治座、歌舞伎座と押して行つて、最後にあの宏大な國技館に、四萬の聴衆を相手に、氏の雄辯が、天に冲する火柱の如く燃え上る時、そして氏の徒歩姿が、兩國橋の向ふまで、群衆の歡呼に送られる時、既に時の内閣の運命は決して居る。

日本は斯の如く變りつゝある。世界と共に、斯く變りつゝある。否寧ろ斯の如く世界化しつゝある。偉大なる雄辯家は、偉大なる藝術家となつた。偉大なる藝術家は、其の世界の覇者である。尾崎氏の藝術は、眞に今圓熟の絶頂に達して居る。吾輩は、大なる興味と、少からざる憂慮とを以つて、今後の變化を注視しつゝある。

——大正三年六月——

跋

本書の著者横山さんは、二十一の時、『帝國の建設者』といふ本を著した。それは英傑セシル・ローツの評傳であつた。横山さんの考へでは、文學史上のえらい人は大抵廿歳前後に其の處女作を出したからといふのであつた。『帝國の建設者』が史上に傳はるべき名著であらうが、なからうが、兎に角、其の處女作を出した年齢に於て、著者はえらい人達のお仲間入りをすることができたといふて然るべきであらう。

然し、横山さんの心は、文章を以て功名を馳せんと希ふたのではなかつた。否、むしろ、そは一の末技にしか値しないと思つてゐたのである。而して志は天下國家にあつた。社會民衆に存してゐた。即ち文章はたゞ其の經國濟民の志を述べる手段に過ぎなかつたのである。然し其の文章は立派な本技であつた。けれども横

山さんは文章を棄てた。文章を棄て、政治の實際に没頭した。政治の實際といふも其の表面ではなくて裏面である。即ち没頭は文字通りの没頭的で、外的に酬むらるゝことない裏面に於て、大に立働いたのである。此の事は世間多数の知り得るとでない。世間の君に親しみの薄いものあらば、たゞそれが故である。君は見物の人氣を買ふに足る舞臺に立つて活躍せずに、常に其の芝居の筋を書きおろす役を勤めたのである。特に憲政擁護運動以來の仕事は大したものである。今これを述べることは、必しも適當な機會でないが、何故に君が處女作後十四五年間沈黙を守つてゐたかを説明するためには必要であらう。いや、實は決して君は沈黙を守つた譯ではない。其の間に日刊新聞を起し、或は雑誌を刊行したりしたのである。大正元年末即ちかの所謂憲政擁護運動が颶風の如く始つた時創刊した『世界雜誌』の如きは五年以上繼續した。世界雜誌は賣らざることと標榜して立つたものである。君は月々數百圓を其のポケット・マネーから割いて、雑誌代に充て、

二

天下の識者、同志に雑誌の無代進呈をなしたのである。其の費用だけでも優に二三人の議員を出すによい程であつた。『世界雜誌』には一行の廣告をも掲載しなかつた。たゞの一回だに何人の援助をも借らなかつた。而して其れは他の遠く追隨することのできぬ贅澤な出版物であつた。横山さんは政治運動と兵糧運動とに寸暇ないのであつたが、しかもなほ筆を執つて天下國家のため、同志のために、或は氣を吐き、或は誨ゆることを怠らなかつた。君はすべての事に就て無報酬で働いたのである。酬むらるべき仕事を常に無報酬で働いたのである。特に君が同志、政友の爲に、自ら其れに必要な費用を負擔して働いた事のしばらくなる、あまり多きに過ぎて擧げるに煩はしい。世界雜誌の如きも君は之を一箇の公共物と見做し、政友のために公開した。而して其の目のまはるやうな忙しい中にあつて君は筆を執つた。『加藤高明論其他』は實に其の産物の一つである。君の其の處女作の後を承けるにふさはしい人物論を公にしたことは注意すべきである。

三

歴史は人間が造る。時代は人物によつて代表される。あらゆるものが人間によつて創造され、支配されることを思ふと、人物論のどれほど價值あるものなるか、直に了解されやう。特に現に生きて居る人々、將來ある人達に對する論評は、其の人達の完成にとつて最も重要な資料である。

私は一年前まで横山さんに一切を委ねられて、過去五年間世界雜誌を主宰した。『加藤高明論其他』の人物論が私にとつて極めて親近な作物であることいふまでもあるまい。若し或る作物に對する親しみといふものが知識であり、知識が批評の可能性であるとするならば、私こそ横山さんの作品に對して何かと最も多く言ひ得る第一人者でなければなるまい。

有體にいへば、私は今まで人物論といふものを好まなかつた。世の中に、是れは確といひうる確らしい者は尠いが、その不確の中に於いて人物論ほど不正確なものがあるまいと思つてゐたからであつた。人に對する人の知識は、たゞ其の肉

眼の達し得た所、肉耳の聞き得た所に過ぎぬ。實際それ以上のことは希望し得られぬものではあるが、私はそれを何となく淺慕なことのやうに思つてゐた。其ればかりではない。私は從來の人物論にきまつて使はれた多くの形容詞を憎んだ。實質、内容とは何等交渉のない空虚な形容詞を以て、概念的に、一般的に人物を十把一からげに決定し去ることの横暴を憎んだのである。たとへば、私にいはせると、殘忍酷薄とか、或は睿知、俊才とかいふ言葉は、其れに該當する材料を列擧した後で斷定しうる結論でなければならぬのに、多くは最初から此等の抽象的或は概念的な言葉を以て論じ去る如き例である。

論者の意見を明示することは誠によい。然しながら、私は、むしろ、其の觀察を具體的に擧げて欲しい。人間の内部外部の生活其のまゝを何等の感情なしに述べて欲しい。言ひ換へると讀者には、たゞ觀察者の觀察だけを記して欲しいのである。即ちそれは讀者のために判斷の資料を供給するものであつて欲しいのである。

る。歴史は創作である。傳記も創作である。各人は各人相應の読み方をするのである。

人間が、單なる蓄音器、寫真器でない限り、人間を通じて感覺し得らるゝものにして人間の主觀を交へぬものはあるまい。人間の思想、人間の言語を以て、表現し再現する所のすべては、其の人固有の主觀を通じてある。如何に純客觀的のものにせよ、其處に多少の『自我』的色彩の加はらざるものはあるまい。此の見地からして、純客觀といふものは存し得ないのである。特に人物論に於て然りである。況や人間が人間を論ずる時程、其の好惡の感情に支配せらるゝことはあるまい。茲に於てか、人物論に於て、客觀的立場程尊貴なものがないことにならう。横山さんの人物論の長所は實に其の純客觀的な所にあるのである。

私は過去の概念的言葉を以て、横山さんの文體を印象派、或は寫實派或は自然主義派と分類することを嫌ふ。さり乍ら、横山さんのそれは、印象派のそれを以

て言ひ表すことができやう。

我等は横山さんの文章に於て、新らしい人物論を見た。君の試みは全く新らしいものである。人物論の形式、内容に於て一新紀元を劃したものである。君の讀者にして或は君の人物論は之を論と稱ふべきものではないとするものがあるかも知れぬ。如何にも、従來の論文と呼ばれたるものは、全く君のそれとは趣きを異にしてゐる。何とならば、君の論は、一種の記述にして、推理斷定の類ひではないのである。君の文は叙事の形式を以て、論理の内容を盡してゐる。私は君の人物論によつて、初めて安心し得る正確さを發見することが出來た。私の不満に思つてゐた所を満たして貰つた事を知つた。私は私の心が不確定的に希望してゐた人物論の革命を君によつて成し遂げられた事を喜ばずには居られない。

また他の方面から見れば、君のあの洗練、あのすつきりした書き振りは、しかもたゞの敘述ではなくて、印象的、寫實的それである。之を一箇の論といふべくあま

りに藝術的匂ひの高いものゝあるに氣づくのである。君の論は立派な小説である。小説中の白眉に値する小説である。私は半の涎れ式現代の多くの小説を嫌悪するものである。

君は元來天成の政治家である。而して同時に天成の藝術家である。君は日本の最高古典藝術の能樂を味ひ且つ之に遊ぶ人である。君は好んで演劇を看、劇評に於ても一箇の權威である。私は曾て君の脚本を見たことがある。それは君の謙遜によつて世に公にされないが、たしかに戯曲界に於て一椅子を占むるに足る底のものである。私はまた、君が日本に於けるツルゲネーフ研究の一權威たることをも併記したい。また更に、君が平常の言葉として、現代の政治家たらんとするには水滸傳、三國志以外に、近代文藝、現代作品に親まねばならぬ、政治は青年と共になすべきではないかといふ見識をも推奨したのである。

私は君を人物論の革命者といはう。君の革命が、或は英のテイ・ビー・オコンナ

ーから受けたヒントによるものとするとも君の成功には寸毫の傷害にならないと思ふ。蓋し人物論に於ける君の唯一のライヴァルは、海外に於けるオコンナーであらうと思ふ。しかもオコンナーの存在は君の人物論の價値の裏書であつて、私は君に於て更に新らしみを見るものである。

私は長々と述べ來つて讀者を厭かしたことを謝する。著書の本文外の本文の如きは、讀者の好意を以て讀まるべきものでないことをも知つてゐるが、もう一言私に曰はして貰ひ度い。先に私の擧げた横山さんの處女作『帝國の建設者』は徳富蘇峯先生の序文を以て民友社から出版された。蘇峯先生の文壇に於ける第一人者であることは今更私の附加へていふまでもないが、曩に蘇峯先生をして、『横山雄偉君は篤志の士也』と呼ばしめた君が、十四五年後の今日に於て、文壇無名の私如きに跋を書かせることの君の見識は大に注目し値するものではなからうか。君は四五年前から青年主義といふものを唱道し來りつゝあるのである。青年

主義といふ言葉は、其の用語を聞いた丈では一寸了解できにくいものではあるが、意味は、青年の特質を發揮せよといふことにあるらしい。而して第二の效用に於て、青年主義は年齢閥の打破である。無用、無爲の老人が、たゞ其の年功によつて跋扈することの排斥である。私は君を推讃すべき文壇、政壇知名有数の士あることを知る。而かも無名私如きに跋を書かしむる君の意の、君の唱道し、信奉しつゝある青年主義よりすることを解して、私は不遜にも筆を執る氣になつた。君亦主義に忠なる哉である。私はとりとめなき本文の君の名譽を汚すことの夥しきを恐るゝものである。終に私をして君のために、今次の總選舉に於て、君の勝利君の當選を祈らしめよ。

東京市外田端の寓居に於て

大正六年三月八日

辱知 竹森 一則

大正六年三月二十二日 印刷
大正六年三月二十五日 發行

定價金七拾錢

著 者

東京府荏原郡大井町二四九八番地
横 山 雄 偉

發 行 者 兼 印 刷 者

東京市京橋區元數寄屋町三ノ一
根 岸 富 三

發 行 所

東京市京橋區元數寄屋町三ノ一
世 界 雜 誌 社

印 刷 所

東京市牛込區塚町七番地
日清印刷株式會社

發 賣 所

東京市神田區表
神保町十番地

上 田 屋

終

